

★  
天 界 新 知 識  
 LATEST KNOWLEDGES ON ASTRONOMY  
 ★

劣矮星の運動速度

ポバ (D. M. Popper) 氏は、カイバ氏が1940年に固有運動や分光視差の研究から分類し、撰定した下記9ケの劣矮星の視線速度を測つた。

星 B. D.	光度 m	分光	$\alpha(1900)$ h m	$\mu$ "	P	視 差 "	全速度 km	向	點
+31°1'84	8.27	G2	7 47.2	1.96	158°	0.038	337	2293°	$\beta-15^\circ$
+54 1216	9.47	F2	8 11.7	0.64	182	0.011	260	211	+ 8
+14 2151	8.42	F0	9 43.5	0.83	156	0.026	150	289	- 3
+26 2251	10.67	F6	11 39.5	0.53	270	0.0084	334	173	+19
+51 1696	9.58	G0	11 41.4	1.00	237	0.022	208	195	+18
+14 2481	10.37	F6	12 07.0	0.43	200	0.011	197	250	+14
+ 2 2538	(9.6)	F2	12 20.5	0.48	180	0.050	166	272	+52
+10 2519	8.65	G2	13 06.4	0.56	297	0.056	54	146	+54
+34 2476	10.17	F0	13 54.8	0.54	161	0.023	185	285	-51

カイバ氏は、分光視差  $\pi_{sp}$  から眞の視差  $\pi$  を算出する場合には、2.2 を乗ずることにしてゐる。又、カイバ氏の言ふところによると、B. D. +14° 2481 といふ星は主系列上にある普通の矮星と、劣矮星 (Subdwarf) との境界線上にある星で、若し之れを普通の矮星とすれば、その空間速度はウンと大きくなる、つまり之れは視差の如何によるのである。但し、B. D. +2° 2538 星だけは、横運動が極めて小さいから、そんなことはないが。

上表で明らかな如く、此等の星は一つとして我が地方星群が銀河自轉として動いてゐる黄經 55° を中心とした半球の方へ動いてゐないのは注意すべきである。尙、上の表のうち、3ケの星の運動方向は銀河面と大きい角度をなしてゐる。

ワルフ・ライエ型の眼視連星一つ

キルソン山のキルソン (O. C. Wilson) 氏は、近頃、H. D. 219460 (B. D. +59° 2683) といふワルフ・ライエ星が、1" の間隔を有つ眼視連星であることを発見した。スペクトル寫眞によると、主星は B 型であるが、伴星は WN5 といふ型のワルフ・ライエ星で、水素、ヘリウム、星間カルシウム等の暗線を見せてゐる。光度は主星が 9.5、伴星が 9.7 である。

この二重星は1900年にドウリトル (Doolittle) 氏が発見した星で、1903年にエイトケン氏が、又、1940年にヴン・マ」ネン氏が観測したことがある。間隔は

約 $1.7^{\circ}$ , 位置角は約 $130^{\circ}$ である。

キルソン氏は、さきに、H. D. 219460星が、やはり珍しいワルフ・ライエ型の連星であることを発見したことがある。[Ap. J. 91, (1940)] この方は間隔が少し廣いが、何れも、分星のスペクトルは WN5 及び B で、寫眞光度は大差が無い。

一般にワルフ・ライエ星は、その特徴ある太い輝線のほかに、水素やヘリウムの吸収線が正常の位置(波長)にあることが知られてゐた。この二つの例により、輝線を現はす星と吸収線を現はす星とは別々であることが知れた。これによつて、一般に變位しない暗線のあるワルフ・ライエ星は連星であると類推される。若し之れが誤りでなければ、ワルフ・ライエ星中の連星は決して少くはあるまい。

今までに研究された19ケのワルフ・ライエ星中、無變位の暗線を有つてゐるのは5星(H. D. 190918, 193576, 193793, 211853, 219460)であり、多少不確かなのは3ケ(H. D. 9974, 168206, 186943)ある。恐らく全體の4割ぐらゐは此の種の連星だらうと思はれる。

## 新刊批評

G. H. Dawin 原著, 中野猿人譯 “潮汐” 東京 古今書院, 6圓。

吾々が“つなみ”と呼ぶものを、英語では Tidal wave と言ふ。直譯すると“潮波”とでも言ふべきだが、誰でも知つてゐる如く、此の言葉は決して潮汐現象ではなくて、むしろ地震や暴風などに起因するものである。しかし、何も知らぬ人が此んな言葉を聞くと、やはり其れは潮汐に關係があるものかと迷はされることがある。理學の素養の無い單なる英語の學生なら此れを誤解するだらうし、又、生粋の英米人は、幼時から此の言葉を使つてゐて、やはり誤つた觀念のまゝ育つて行くのがあると思ふ。グーテンの此の名著は、開卷の第一頁に、この英語(の俗語)の解説をやつてゐる。親切でもあり、又、多少のユーモアでもある。然るに、中野氏の此の譯本には、“つなみ”といふ日本語を一回も使つてゐないから、この肝腎の所の譯文が今少し食ひ足りない恨みがある。英文としては、原文のまゝで宜いのだが、日本語に直したのである以上、是非一度は“つなみ”といふ言葉を使つて置いて欲しい。

グーテンの此の著は學界の名著であつて、1898年に原本が発刊されて以來、各國語に譯され、潮汐學の通俗書として既に古典的なものである。此の書が今日日本語版として出たのは喜ばしいことであるが、潮汐學の専門家である中野氏も、英語者としては多少不準備であつたか、或は譯を急がれたのか? 惜し